

木村文助研究

通信 21号 2010・5・6

合唱劇「村に咲く花」練習に入る

先日合唱劇実行委員会事務局長の前田さんにお会いすると練習に入ったという。

木村先生の指導のもと、貧しくてもたくましく生きる子供達が登場し、「赤い鳥」、「村の子供」などに入選した児童の作品「櫓」、「涙」などが盛られ、一時間半以上の構成になるもよう。

なお当研究会では過日の総会で支援を決めた。

合唱団員募集

歌が好きな方なら経験・年霊問わず。七月上旬から練習開始。週一回程度を予定。

問い合わせ 七五―二九八六（事務局・前田さん）

来年二月頃、北斗市誕生五周年記念事業として発表予定。

.....

三・二〇 地域情報誌「ポラット」に『永遠に明るく

音楽会』事務局長が語る

四・二 北斗市教育広報「きらめき」⑩号連載『赤い

鳥』に載った郷土の作文「ある婆さん」(推奨)

大野小尋六 吉田孫七

〇九年

一一・五 「木村文助研究」通信No.2

〇号発行

一一・三〇 合唱劇実行委員会・郷土資料館

一一・二九 大野小学校学習発表会、四年劇「意富比神社と大野」

の中で綴り方朗読が入る

一一・一 あの日の歌風景「からたちの花」大正一三年「赤い

鳥」掲載・北海道新聞へ合田道人氏

一一・二〇「永遠にあかるく音楽会」合唱劇で綴り方朗読を挟み

演じられる

一一・二二 「永遠にあかるく音楽会」合唱劇記事・北海道新聞、

函館新聞

一一・二六市民創作の音楽会実行委員長 熊本昇さん・函館新聞

一〇年

一一・一 北斗市歴史文化クイズに投稿・ほくほくかわら版

一一・八 「木村文助の生涯合唱劇で伝えたい」北海道新聞

一一・三 北斗市教育広報「きらめき」⑩号連載『赤い鳥』に載つ

た郷土の作文「私のおもい」(推奨) 大野小高一 斎藤き

え」



大野の綴り方・子ども達の声を甦らせたい

＝大正から昭和の教育・文化を合唱劇に＝

永遠にあかるく音楽会実行委員会（実行委員会）

事務局長 前田 治

私が初めて「綴り方」に接したのは一昨年のことです。「馬鹿はつ子」を読み、なぜか涙が止まりませんでした。幼い頃の出来事と重なりました。私の身近なところにも同じような境遇の人がいたこと、作者と同じように興味半分に後ろをついて歩いたこと。



その後、木下先生から『綴り方生活 村の子供』をいただき、一気に読み上げました。

どうしてこれ程の感動を受けるのか・・・ 全く飾りのない子供達の素直な声とそのままだけに書きだされた作品だからこそ、そして真実が書かれているからこそ、素直な心で受け合えるんだと感じました。

私達が進めている実行委員会では、大野町、上磯町が合併し北斗市誕生5周年にあわせ、「地元で根ざした題材を基に作品を創りたい」という想いを基本に検討している中で、綴り方指導者・元大野小学校木村文助校長先生にたどり着きました。そして、これらの綴り方作品を合唱劇という舞台芸術として市民に紹介したい。これは、私のみならず、実行委員全員の想いとなっていきました。

貧乏な生活、いじめ、今よりも身近にあった人の死。そればかりではないが、その頃はみんな、ぎりぎりの生活をしていました。木村校長は子どもたちに、綴ること、自分の心と向き合い、受け止め、強く生きることが大切だと教えた。

それを、今を生きる子供達に伝えたい。

様々なものを背負って子供達は、この厳しい社会に生きています。それなのに、人に話したり、受け止めてあげられる環境が少なくなってきました。だからこそ、かつて大野の子供達が自分の生活をあからさまに綴った素直な『声』は、時を越えても、心に響き、そしてこの作品の上演により、「ふるさと北斗市」の歴史や暮らし、当時の人々の喜び、苦しみ、悲しみを知るとともに、故郷を築いてきた先人への尊敬と理解を深める機会にもなるはずで、今市内では、歴史・文化・伝統の継承が叫ばれています。

公演にあたっては、市民はじめ、市内の小・中・高校の児童・生徒らに広く呼びかけ、幅広い市民の力で歌い・演じることで、文化の花咲く北斗市を目指したいと願っています。



北斗市郷土資料館
「赤い鳥・木村文助」コーナー



木村文助

連載 『赤い鳥』に載った郷土の作文

大正から昭和の初め、童話作家の鈴木三重吉が発刊した児童文芸誌『赤い鳥』に掲載された大野小児童の作品を紹介します。大野小は当時、木村文助校長が子供たちの綴方(つづりかた)を作文や絵を投稿し次々と入選、「日本一の綴方学校」といわれました。

私のおもい(推奨)

大野小高二 齋藤きえ

私の妹や弟たちが、何かことを起こして泣いたりすると、家のお祖母さんが、「またきえ(が)泣かせだべ(たんだらう)」と怒るので、朝、学校に行く途中、雪が降って、妹や弟がころんだり、馬の足穴(あな)でできた穴に足を落として靴の中に雪が入って泣いたりすると、私が手袋を貸してやったり、マントの雪をはらってくれたり(あげたり)、靴の中の雪を取ってくれたりして、ようようのことで学校につくのですが、学校も終わって、家に帰って来てから、妹や弟の話を聞いていると、「きえちゃんかねえ、ばっちゃん、朝に学校さ(へ)行く時、おらばつかし(私のことばかり)怒って、マントの雪、なも(なにも)落としてけねもんだ(くれないよ)。」

んだ」と言っていた。私はその時、あッと思いましたが、奥へ行って、学校道具をおろして、今度、台所に出るのが何だかきまりが悪いような、おつかないような気がして、行きたくないもので、しばらくたってから、台所に、そこそこ(このそり)と来て(火に)あたっていると、お祖母さんが「きえ、なして(どうして)、わらさどは(子供たちを)、そたらにそたらに(そんなに)おごてばし(歩くんだ)怒って(ともない)。ほかの子供たち、まあ行って見れであ(よその子供たちを見てみなさい)、感心にわらし(子供)めんど(見)る(みるのに)、汝(は)した(お)ま(ただ)だけ(よ)」と言ったので、私が「や何も(だけ)や(いや)なにも(だよ)、そたらに(お)ごて(歩)が(ね)や(そんなに)怒(つ)て(い)ないよ。ころ(んだ)り(した)時、手(つ

めて)が(手が)冷(たい)だ(らう)と思(つ)て(手袋)まで(貸)して(け)でも(ね)貸(して)あ(げ)ても(かい)」と(言)うと、(祖)母(さん)が「そ(で)ね(で)い(だ)であ(そう)で(は)な(い)と思(う)よ。わ(ら)し、し(や)べ(て)い(だ)も(の)子(供)が(話)して(いた)も(の)」と(言)ったので、私(が)心(中)で、あ(あ)、だ(ま)つ(て)い(だ)方(が)得(だ)、し(や)べ(ると)か(え)つ(て)怒(ら)れ(る)と思(つ)て、下(を)向(い)て(だ)ま(つ)て(い)ま(した)。部(屋)へ(行)つ(た)ら、そ(の)ま(ま)泣(き)崩(れ)て(し)ま(い)ま(した)。それ(か)ら(勉)強(し)て、道(具)を(し)ま(つ)て(か)ら、外(に)出(て)み(た)ら、雪(明)か(り)で(明)る(い)の(に)、そ(の)上(上)月(が)出(て)明(る)か(つ)た。私(が)川(端)の方(方)に(行)く(と)、月(も)い(っ)し(よ)に(な)つ(て)、つ(い)て(来)ま(し)た。私(は)川(の)ほ(と)り(に)立(っ)て(い)る(と)、い(ろ)い(ろ)の(こ)と(が)思(い)出(さ)れ(ま)す。私(が)こ(う)し(て)い(る)こ(ろ)を、お(母)さん(が)覚(え)て(知(つ)て)い(て、私(を)迎(え)に(来)た(ら)ど(う)だ(ら)う。私(の)ほ(い)て(行)く(靴)、新(しい)着(物)、帯(など)を(持)つ(て)、顔(の)色(は)青(く)、唇(は)白(く)、血(の)け(は)少(しも)な(く)、手(は)力(な)く(だ)ら(っ)と(して、ふ(ら)ふ(ら)と(し)て(可(哀)そう(な)身(なり)を(し)て、目(の)前(に)立(つ)た(よ)う(に)思(わ)れ(た)。それ(で)も(い)か(ら、私(を)函(館)に(つ)れ(て)行(つ)て(く)れ、さ(も)な(か)つ(た)ら、二(人

手(を取)つ(て、ど(こ)か(に)逃(げ)て(行)き(たい)、い(つ)も(あ)の(子)供(た)ち(の)た(め)に(悪)く(言)わ(れ)る(し、ど(う)し(たら)よ(か)ら(う)、と、た(だ)一(人)で(思)い(ま)し(た)ら、ひ(と)り(で)に(涙)が(前(掛)の上(へ)落(ち)ま(し)た。また(い)ろ(んな)こ(と)を(思)つ(て)泣(い)たり(し)て(いた)け(れ)ど、こ(う)し(て)い(た)つ(て)つ(ま)ら(な)い(と思)つ(て、唱(歌)の「青(い)月(夜)の(浜)辺(には)」とい(う)の(を)歌(つ)て(か)ら(家)に(入)り(ま(した。 (大正十五年七月号)

■ことばの意味

『青い月夜の浜辺には』(浜千鳥) (鹿島鳴秋作詞・弘田龍太郎作曲)の冒頭の歌詞。「親を探して鳴く鳥が 波の国から生れでる」と続く。親を捜す子千鳥の寂しさ、悲しさを訴える歌詞は、作詞者・鹿島が孤独な生い立ちを詩にしたといわれる。

綴方選評(抜粋)

鈴木三重吉

齋藤さんの「私のおもい」は、小さな胸いっぱい迫った苦痛を、そのまま端的にかいているだけに、いかにも実感がみなぎっていて哀れです。おばあさんが間違つてがみがみ言われるのに対して、きつく抗弁(こうべん)反論(はんろん)もせず、ひとりで我慢して陰で泣

いているところもいらしいし、月光の中へ出て、恋しいお母さまを目の前に描き浮かべるところなどは立派な幻想的叙写で、しんからほろりとさせます。しまいの方で、月光の中で涙ながら歌うところは、ただの場合だったら、いやな少女小説の一句のようでキザですが、真実なので少しもイヤミに感じられませぬ。おばあさんに反抗しないのでこらえているのは、それだけ家中の騒ぎが少なくなるわけですが、ありもしないつくりごとを並べて、齋藤さんをいじめる妹さんや弟さんに対しては、なぜよく穏やかに言い聞かせないのです。おばあさんの偏愛(へんあい)は老人にありがちで、直すことは困難ですが、小さな妹さんたちがうそをつくのは許されないことです。これでは齋藤さんがつらいばかりでなく、妹さんたちのためにもなりません。齋藤さんが姉さんとして言つて聞かせ、その悪い癖をとつてしまふように努力しなければいけません。いろいろ事情のあることでしようが、齋藤さんはあくまで忍耐強く切り抜けていらつしやい。大きくなられるにつれて、希望も開けていくことと思います。

(教育課 八木橋直弘)

赤い鳥・木村文助コーナー

《北斗市郷土資料館内》

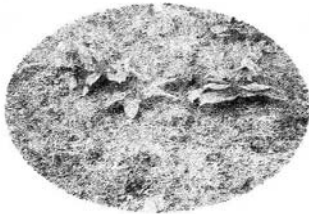
041-1201

北海道北斗市本町2丁目12番7号

TEL (0138) 77-6681

閲覧 9:00~16:00

休館 年末・年始、臨時



- 函館方面→車で、国道227号を通り大野市街地へ入る
- 道北方面→車で、国道5号の大沼トンネルを抜け、10分ほどして大野方向へ右折し、更に市街地へ進み5分で着く

発行・大野文化財保護研究会
(略称；文保研・ぶんぼけん)
会長；木下寿実夫
○四一―一二〇一
北斗市本町六八
(0138) 77・8535



大野地区市街地の大野小学校門に入り右側木造の建物